

論文

ダンテの煉獄と都市社会

原 基晶*

1. はじめに

現代における『神曲』理解は、イタリア王国成立と機を一にしたロマン主義的クリマの中で出発した。つまり、ロマン主義の代表的な批評家デ・サンクティスのように、『神曲』の主人公ダンテ＜私＞の感情を作者ダンテの感情と同一のものとして理解することから、現代のダンテ批評史は始まったのであるⁱ。そしてダンテはイタリア文学史上最大の詩人とされ（それ以前にはペトラルカが全ヨーロッパ的にもイタリアにおいても評価が高かった）、イタリア国民の祖型であるその彼が国民国家イタリアの国民文学である叙事詩『神曲』を創造したとされたⁱⁱ。この出発点において現代のダンテ批評が抱えこんだ枠組みは、1960年代以降、主人公ダンテと＜私＞を同一の存在と扱わなくなつた後でもⁱⁱⁱ、大きくは変わらなかつた。そしてEUが発足した後、国民国家体制が揺らぎつつある現在においても、少なくともイタリアにおける一般的なダンテの位置づけは国家とイタリア文化の象徴としてのままである^{iv}。また、同じ時期に国民国家を成立させた日本においても、そうした国民国家の詩人ダンテと国民文学としての『神曲』という理解がいまだに一般的であるようと思える^v。

上記のような理解は、近代を国家の到達点とした場合の、ルネサンスを中世との断絶の時代と読み解いた歴史観（例えばブルクハルト）や、その後の、中世には近代とは別な枠組みがあるとし、それを起点としながらルネサンスを中世の延長と考え、最終的には現代の国民国家成立までを、その連續性を特徴にしてつなげてきた歴史^{vi}を反映したものであると考えられる。もちろん、国民国家成立の基盤が統一言語とジャーナリズムの浸透にあると考えるならば、イタリア概念を宣言し、その言語の創出に挑戦し、その歴史を叙事詩に刻み込んだダンテを出発点に置き、その基盤の上に構築される文学史は、まさに国民国家イタリアのため

* 東海大学文学部ヨーロッパ文明学科

のものとしてふさわしい。しかし、本論文では、各国史の集合体ではない世界史の中にダンテを置いて論じてみたい。それは、従来から言われてはきていたが（しかしその中で正しくは位置付けられてこなかった）商業革命と都市社会の成立の申し子としてのダンテである。

2. フィグーラ論を振り返って

これまで筆者は、上記にもあるように、『神曲』を読み解く上での留意点＜私＞のフィクション性について議論してきた^{vii}。またその中で、私こと主人公＜ダンテ＞が予型論という中世の解釈学的文化の産物であり、作者ダンテによって、その主人公であるダンテは預言者としての性格を与えられて、創造されたことを確認してきた。

予型論的解釈、つまりフィグーラ論は、ドイツに生まれ、ナチスの迫害を逃れてアメリカに渡った比較文学学者アウエルバッハによって知られている。彼によれば、フィグーラとは二つの出来事あるいは二人の人物の間の関係を設定するものであり、その歴史性において通常のアレゴリーとは区別される。

「その関係においては、二つのうちいずれかがたんに自分自身を意味するのではなく、他方をも意味し、また逆に、この他方はもう一方を包含するか、あるいは成就する。フィグーラの両極は時間的に分けられているが、両者は、現実的な出来事あるいは、形姿として、時間の内部に横たわっている——大多数のアレゴリー、文学、あるいは造形芸術のそれは、徳（例えば、知恵）や情熱（嫉妬）、あるいは制度（法律）また、ひょっとすると歴史的現象の最も一般的な総合（平和、祖国）を表現する。決して特定の出来事の完全な歴史的内容を表現することはない。プルデンティウスの『靈魂をめぐる戦い』からアラヌス・アブ・インシリス、および『薔薇物語』（*Roman de la Rose*）に及ぶ古代末期—中世的伝統のアレゴリーはそのような種類のものである——フィグーラ的解釈が聖書を説明する際に絶えず戦わなければならなかつたアレゴリカルな方法はこの種のものである^{viii}」。

また、その同じアウエルバッハは、『ミメーシス』で、『神曲』は「最終的には一人の人間、すなわちダンテの発展と救済の伝記であり、それゆえにまた人類一般の救済史の比喩形象（フィグーラ：筆者）^{ix}」となると述べている。

特に注意したいのは、引用部分で下線を引いた「現実的な出来事あるいは、形姿として、時間の内部に横たわっている」という一節である。個的特徴を持たず、抽象的、類型的な存在でしかないアレゴリー的表象と異なり、ダンテが予型論で描くのは、歴史上の特定の人物の、彼を象徴する現実的な事件である。つまりきわめて歴史的な構造を持つ予型論の中では、『神曲』を際立たせているダンテの筆致、すなわち現実描写は、その鋭さを失うことはない。

ここでフィグーラ論を取りあげた理由は、アウエルバッハの主張である、フィグーラからダンテの現実描写が生まれたと主張するためではなく、むしろ、ダンテが多用したこのレトリックが歴史的な時代区分を必要とし、それゆえにダンテは、現代の時代区分とは異なるけれども、古代から同時代までの歴史の流れのある時点に、大きな分水嶺を見ていたということが分かるからだ。この感覚ゆえに、後で見るように、彼の現実描写は、ダンテ自身のいる西暦 1300 年の「現代」の状況をもたらすことになったダンテと同時代、あるいは近い時代の人々や出来事に顕著となる。つまりそうした表現は、ダンテの持っている「歴史意識」、換言すれば時代区分と彼の抱いていた問題意識に由来する。なぜならば、明確に「二つの出来事あるいは二人の人物の間の関係」を意識する必要のない人々を選び、現実描写の対象にした理由は、フィグーラ論では説明できないからだ。

ダンテ以後のペトラルカによって「中世」という用語が発明されたこともあり、近年までルネサンスは中世と区別され、近代の起源はルネサンスに求められてきた。また、ダンテが古代ローマ帝国の皇帝権と中世の神聖ローマ帝国の皇帝権を区別していないことから、ダンテの歴史観はアナクロニズムとされ、これまで彼の時代区分はあまり注目されてこなかった。しかし歴史的な構造を持つ予型論的レトリックを多用するダンテは、『神曲』を注意深く検討してみると、同時代とそれ以前とを明確に区別していることが読みとれる。そしてダンテが自身の時代の特徴を明確に認識しているのならば、近年における歴史学の発達によって、ダンテの作品解釈の格子となる歴史像が大きく変わってしまったために、ダンテの作品の解釈も大きな変更を求められることになる。

3. ダンテの時代区分

ダンテは、封建主義社会の貴族やその宮廷の文化・社会と、都市の商人たちの世界、つまりダンテにとっての「現代」の文化・社会とを明白に区別していた。「地獄篇」においては、最初に第五歌で愛欲の罪が取り上げられるが、そこでは、オリエントの女王やギリシャの戦士たちに続き、中世のアーサー王の宮廷に所属する騎士トリスタンの名があがり、その後にダンテ当時の宮廷世界の貴族、つまり騎士的世界の住人であるパオロとフランチェスカの罪がリアルに描かれていた。ダンテは、彼と同じ時代までギリシャ・ローマの王族や貴族の伝統が続いてきたと考え、彼らを皆、同一の騎士という範疇に入れている。この場合、歴史は連続性が意識され、現代の我々から見ると時代錯誤的に見える。

その一方で、続く「地獄篇」第六歌では、都市フィレンツェの住民であった罪人チャッコの口から、都市フィレンツェ分裂と争いに関する著名な罪人たちの名があげられる。そのリストは1200年代以降の皇帝党と教皇党の政治闘争に関係した人物たち、ファリナータ、テッギアイオ・アルドブランディ、ヤコポ・ルスティックチ、モスカ・デイ・ランベルティ（順に「地獄篇」第十、第十六、第十六、第二十八歌に登場）らに絞られている。ダンテは明らかに都市的世界を封建主義的世界と分けて考えているのだ（なお、続く第七歌では聖職者の吝嗇が糾弾されており、ここからダンテは、中世の身分制の社会における貴族と都市住民と聖職者の区別をつけていたことが読みとれる）。

この区別がさらに明確に意識されているのは、暴力者の圈と呼ばれる、「地獄篇」第十二歌から第十七歌までにおいてである。そこでは、地獄の浅い層と同じく、最初の第十二歌で、貴族=「騎士」たちである僧侶が罰せられており、その僧侶たちは古代世界から中世のアッティラ、そしてダンテの同時代の小領主までが名を連ねている。ここでは、ダンテの現実描写は彼らを象徴するケンタウロスたちの表現にあてられ、その見事さゆえに、ダンテは美学的見地から美しく作り上げすぎてしまったなどの評価も受けってきた*。続く第十三歌では、ダンテと同時代の戦乱の原因の一つに、貴族=「騎士」つまり封建領主の側の問題として、ローマ皇帝権の失墜が取りあげられ、神聖ローマ皇帝フェデリコ二世の宰相ピエロ・デッラ・ヴィーニャの地獄における変容した姿が見事な筆致で描かれる。なお、そこで象徴的に対比されているのは（これを予型論的と言ってしまうには勇

気がいる)、おそらくは聖ペトロである。続いてダンテの時代の戦乱の原因の、都市の側における考察が、第十五歌においてはダンテの師であるブルネット・ラティーニ、第十六歌においては、第六歌でも名前があげられていたフィレンツェ教皇党の軍人たちであるテッギアイオ・アルドランディやヤコポ・ルスティックチらを例に行われる。

そして第十五歌ではフィレンツェの腐敗の起源を古代ローマ時代に置きつつも、しかし続く第十六歌ではその腐敗の原因を、ダンテも経験している1200年代初頭からの都市の拡大による封建貴族を中心とした勢力の都市住民化と銀行業の肥大化に求めている。つまりダンテは1200年代から始まった、現在は商業革命と呼ばれるようになった大きな転換期の存在を意識していたのである(現代から見ると、それは気候変動も含めたさらに大きな変化の一部なのだが)。さらにそのまとめとして、第十七歌では、都市世界の住人である大銀行家たちが列挙される。なお、大銀行家は、封建世界の軍人である貴族たちを教皇庁の傭兵にするための戦費調達に関係している。どの歌の描写も、みごとな現実描写で描かれ、登場人物たちは個的特徴を保っている。

こうした封建世界と都市世界(そして他の圏においては聖界も)の区別は、さらに罪の重い地獄深部マレボルジェでも繰り返される。例えば第二十一歌では都市ルッカの大商人=政治家の汚職の罪が裁かれ、第二十二歌では貴族の宮廷世界の汚職の罪がおそらくは13世紀半ばのナヴァール王国の吟遊詩人に代表されて俎上にあげられ、続く第二十三歌では、聖職者の汚職ともいえる聖職売買の罪を俎上に上げるために、イエスの殉教に関係するカイファと、都市フィレンツェの教皇党と皇帝党の争いにかかわった聖職者が登場させられている。また、第二十一歌、第二十二歌では、第十二歌で傭兵=騎士を象徴したケンタウロスが古典的な美しい描写を受けていたのと対照をなすかのように、当時の宮廷世界の領主=騎士の暴力的側面を強調した悪魔たちがコミカルで猥雑、かつリアルな描写を受けている。

これらのまとめとして第二十六歌にギリシャの知将オデュセウス、第二十七歌に皇帝党の知将グイド・ダ・モンテフェルトロ(と教皇ボニファティウス八世)、第二十八歌の前半で、聖職者の代表としてイスラームの創始者ムハンマドを描き、その歌の最後で、同時代の僭主たちの争いが絶えないロマーニャ、フィレンツェの内乱のもととなったフィレンツェの教皇党と皇帝党の貴族たちの内乱の発端

(その中で前述のモスカの姿も描かれる)、ヨーロッパでの王家の内紛とそれに関与する高位の吟遊詩人の姿を描いていく。

こうして整理してみると明らかになるが、ダンテは、古代ギリシャから連続するものとダンテが考えた封建貴族の世界と、ダンテもその構成員だったダンテにとっての現代の都市世界を区別し、それぞれを別に扱い（もちろん、世俗世界と区別される聖界も区別されているが、それは「世界」の区別であり、ここでは考察の対象としない）、そして第十五歌に限らずフィレンツェのローマ起源説にしばしば言及されていることから、ダンテの暮らす中世の都市の遠い起源をローマに求めつつも、その変質の発端を明らかに教皇党と皇帝党の争いに見ていることが分かる。その歴史的な経過の上に、ダンテ自身をも巻き込んだ「現代」の社会的・政治的混乱の原因を一種のバブル経済的な状況⁴に見ていることは明らかである。そこで次節では、ダンテと直接交流のあったダンテの師、ブルネット・ラティーニ、およびそのブルネット・ラティーニと同世代のフィレンツェの軍人と＜主人公ダンテ＞が直接、さながら本当に対話しているかのような描写が行われる「地獄篇」第十五歌、および第十六歌をとりあげ、ダンテがそこに何を見ていたのかを検証する。

4. 暴力者の圈概略

『神曲』の構成上、各歌単位でその内容をおさえていくというのは、もちろん形式上の要請でもあり、仕方のないことである。しかし各歌は独立してはいても孤立しているわけではない。「地獄篇」第十五・十六歌は同一の主題を扱いつつ、内容的にはきれいに対称をなす。第十五歌で、ダンテはフィレンツェ出身の文人・政治家であった、師ブルネット・ラティーニと出会い、その旧師から自身を待ち受ける過酷な将来が告げられる。続く第十六歌では、旧師と同世代に属するフィレンツェ出身の三人の優れた軍人・政治家に出会い、今度はダンテが『神曲』のなかで初めて、祖国フィレンツェに対してその堕落を糾弾する言葉を放つ。内政面と軍事面、知的側面と行動的側面、罪人の側からの予告とダンテの側からの預言者のような言葉。この二つの歌では、フィレンツェの社会的変動という同じ問題に対して、ダンテが意図的に二つの側面から検討を加えている。

すでに前節で多少の説明はしたが、両歌の検討に入る前に、この第十五・十六

歌を収める地獄の第七圈についての概略を示しておこう。この圈は、怒りのおもむくままに暴力をふるった者たちが封じられる暴力者の圈であり、三つの小圈に分かれ、戦乱に明け暮れる当時の世界の様子が地獄に投影されたものとなっている。第一小圈には第十二歌があてられ、他人に暴力をふるった者たち、殺人者や略奪者が配置されている。第二小圈には第十三歌があてられ、已に暴力をふるった者たち、自殺者や浪費で破滅した者が配置されている。ところがそれまでの各小圈に一歌という配分ことなり、この第三小圈には四つもの歌があてられている。つまり、ここで扱われる命題が重要なものであることは構成の上からもはつきりとしており、この、四歌が一続きになっている第三小圈は当時の都市国家に焦点をあてている。

その第三小圈は神に暴力をふるった者たちを収め、三つに分類される。第十四歌は神を罵った者たちを、第十五・十六歌は同性愛者たちを、第十七歌は高利貸しを描いている。第十一歌ですでにウェルギリウスからダンテに(すなわち読者に対して)解説がなされているが、同性愛者は神から贈られた自然=本性に背いたという理由で罪あるものとされ、高利貸しは神の贈り物である自然を犯し、人間の労働を侮蔑する行為をおこなったとして罪あるものとされる。このように、第十五歌・十六歌でフィレンツェの重要人物たちが裁かれた後で、第十七歌では、ダンテが世界の混乱をもたらしたとする銀行家が裁かれるのである。それゆえここには、ダンテが当時の都市の世界の状況をどのようにとらえ、その状況に対しかねるアプローチを考えていたのかが明らかにされていると考えられる。

5. ブルネット・ラティーニとフィレンツェ

第十五歌の主人公はブルネット・ラティーニである。まず始めに、この人物の生涯を簡単に紹介し、あわせて当時のフィレンツェの状況を抑えておくことにする。ブルネット・ラティーニは公証人ブオナッコルソ・ディ・ラティーニを父として 1220 年に生まれた。彼は 1260 年、追放処分になっていたフィレンツェ皇帝党と皇帝党の牛耳るシエナとからなる連合軍にフィレンツェが攻められたさい、軍事的援助を求めてスペイン半島のカスティーリヤ王国の賢王アルフォンソのものとおもむく。帰途、モンタペルティの戦いでフィレンツェ側が大敗したことを見聞き、フランスに亡命。1266 年ベネヴェントの戦いで皇帝党が敗れるとフ

イレンツェに帰還。政府の書記長官や統領（合議体の最高意思決定機関のメンバー、任期は二か月間）など都市国家の重職を歴任した。1294年死亡。その時代の最も重要な政治家であり、また最も重要な文学者であった。キケローを俗語（当時のイタリア期の文語）に訳し、古フランス語で百科全書的著作『トレゾール』を書き、詩では、俗語でアレゴリーの手法を多用した『テゾレット』を著した。

ここからブルネットの果たした歴史的役割がはっきりしてくる。すでに本論文で述べているようにダンテは時代の変化を感じとてそれを作品中に描いているが、その変化とは、閉じた農業経済を特徴とする封建制社会から、都市を中心にして人、物、財の移動が活発になる商業経済社会への急激な転換であった。キケローの翻訳をしたことにも見られるように、ブルネットの業績は、そのような変化を経験していたイスラームの思想を学び、共和制の合議体制を運営するための技術である雄弁術をフィレンツェにおける市民による都市共和制に持ち込んだことにあるとされる。彼は自由な討論により都市の政治を運営する体制を整えたのである^{xii}。マリア・コルティは、イスラームの思想とトスカーナとの接点を、ブルネットも訪れたカスティーリヤのアルフォンソの宮廷にも求めている^{xiii}。カスティーリヤは当時、先進のイスラーム文化をヨーロッパが吸収する拠点の一つだった。また、ブルネットが参照したアリストテレスの『ニコマコス倫理学』は、都市文明化されたイスラーム文化圏で訳され注を付けられたアラビア語版のものをラテン語訳したものだった。その結果、商業活動は幅広く自由に展開されるようになり、文化的にも道徳的な自由の範囲が広かった。

こうしたブルネットに対する評価は現代の民主主義的社会から見ると肯定的に評価でき、彼を同性愛という罪で地獄に墮としたダンテは、反動的なキリスト教倫理観の体現者であるように思われてしまう。そして実際に、ダンテは社会・経済的な歴史的展開に対して、時代の流れから決定的に取り残されていたという評価があった^{xiv}。それゆえ、旧師が代表している社会的・経済的変化に対するダンテの「新参者たちと降って湧いた大儲けが／傲慢と放縱を産んだ^{xv}」という主張は、罪人たちに共通するフィレンツェでの指導的役割と教皇庁の世俗権伸張に加担した対外政策という共通点を認識していなければ、ただの反動的な復古主義にしか見えない。実際、名著とされる『ルネサンス都市フィレンツェ』^{xvi}ではダンテについて「守旧派貴族のダンテは、フィレンツェがより広い社会基盤に移行してゆくのを看取して、深く嘆いた。都市では『新参者』が古い支配階級に挑戦

し、公職と権力をしだいに手に入れていった」とされている^{xvii}。

こうした見解は、ダンテの倫理的な厳格さとあいまって、ダンテのブルネット・ラティーニに対する扱いをめぐる意見の混乱をもたらしてきた（その中には考えられないような突飛なものまで含まれていた^{xviii}）。現在では、一般には、ダンテの描く師と弟子の二人の対話が、互いに相手への愛情にあふれていることや、師に対して敬語の人称を使っていることを理由に、師としての、文学者としてのブルネットをダンテは高く評価しつつも、キリスト教的倫理観からはずれた私生活ゆえに彼を地獄に置いていると説明される。

だが、現実には、一世代後のダンテの時代、すでに武力を保持していた封建領主層と結びついた大商人（マニヤーティ豪族）、その中でも特に大銀行間の私闘が激しくなっていたため、ブルネットのとっていた自由な方針によっては、都市の政治はうまく機能しなくなっていた。第十五歌で、ダンテは的確にその原因を指摘している。次節ではそれを確認してみよう。

6.ダンテとフィレンツェ

「地獄篇」第十五歌の一一行目(以下『神曲』からの出典表示は、地・十五・1)は酷似した冒頭を持つ地獄篇第十歌を読者に思い出させるという役目を担っている。(なお、文体的には、地獄内城にある暴力者の圈内の第三小圈で、神に対して暴力をふるった者たちの場所からダンテとウェルギリウスの二人が遠く離れたことを示し、新たな場面への切りかえを準備している)。ここでは類似を理解するために原文で比較してみる。

Ora cen porta l'un de' duri margini

「いまや堤の一つが私たちを遠くに運んでいる」(地・十五・1)

Ora sen va per un secreto calle,

「いまやせばまったく小径を(師は)歩いている」(地・十・1)

ダンテは、第十歌では、炎に包まれた石棺の中に封じ込められた、彼より一つ前の世代に属するフィレンツェ皇帝党の領袖であるファリナータ・デッリ・ウベ

ルティと教皇党の領袖カヴァルカンテ・ディ・カヴァルカンティに出会い、フィレンツェの政治について話す中で前者から己の未来についての不吉な言葉を聞いていた。

彼はここ第十五歌、地獄の第七圈、第三小圈の火の降る灼熱の砂漠では、第十歌と同じくダンテより一世代前の師と出会い、フィレンツェの政治について対話する。その出会いの背景を準備するにために、読者の頭の中に現実世界の街角を浮かばせようと、まずブルージュ、次に北イタリアのパドヴァをたとえに使ってその場所を描写してから、次に師の混じる罪人の一団を描くのに、薄暮の月明かりと都市の街角にある針仕事の工房を登場させた。こうして舞台を整え、作者ダンテは、登場人物ダンテを驚きとともに師ブルネットに出会わせる。ダンテは、砂漠を横切る血の川の堤（川から湧き上がる血煙が火の灰を消し、両側の鋼色をした堤の上が通り道になっている）の上を歩き、ブルネットは下の砂漠の上を歩きながら、対話をしていく。最後にブルネットは自分のいた罪人の群れに急いで加わり、歌が閉じられる。第十歌でもそうであったように、ここでもダンテは己の個人的な運命とのかかわりのなかでフィレンツェを政治的・倫理的にとらえかえそうとする。

「一人が私だとわかり、私の服のすそを／つかんで叫んだ『なんという驚きだ』」（地・十五・23-4）

ここでは地上での師弟関係が逆転し。堤の上を歩く弟子の服のすそを、下の砂漠を歩く師がつかんでいる。このあとに続く登場人物ダンテの台詞が愛情にあふれている一方、作者ダンテは意識的に両者の立つ位置を逆転させている。弟子は師を超えたと宣言しているのである。そして、この後の対話で二人の思想の違いは際立っていく。

「いかなる運命、あるいは定めが最期の日がめぐってくる前に、ここ地底におまえを導いたのだ」（同 46-7）

通常の印刷本では、このくだりの「運命」は *fortuna* と書かれ、小文字で始まる。一方この歌の 96 行目でダンテはこの同じ言葉を大文字によって *Fortuna* 「運命

の女神」とする。両者のニュアンスには明確な違いがあり、ダンテの言葉は神の意志を地上に伝える役割を持つ何かを示し、一方でブルネット・ラティーニの言葉は決定論的である。彼の言葉には「運命」あるいは「定め」が人間の行動を決定し、人間の側の自由意志が否定されているかのような気配がある。そのブルネット・ラティーニの思想がイスラーム起源のものであることがこのあとはつきりする。

「おまえはおまえの星に従うがよい、／栄光の港にたどり着けないということはありえない～～おまえにとってあまりに素晴らしい空の配置を見ついて／おまえの仕事を支えることができたのに」（同 55 - 60）

ブルネット・ラティーニのこの台詞が表現しているのは、イスラーム思想の占星術的決定論である。それは、神の意志は星の配置によって地上に伝達され、地上の事物の運行もすでに決定されているため、人間の自由な意志が存在する余地はないというものであった。60 行目の「おまえの仕事」とは、「作品」ではなく、市民としての責務という意味での「仕事」となる。ダンテは、師の活動が政治家としてのものであることを了解していた。換言すれば、両者は文学に、あくまで社会的な活動を果たすことを期待していたのである。このあとブルネット・ラティーニの言葉はダンテの将来に待ち受ける不幸を告げる。教皇党黒派が権力を握ったときにフィレンツェから追放され、さらに亡命中には、味方であるはずの白派からも攻撃されるであろうというものだった。

ブルネット・ラティーニはフィレンツェの騒乱の原因を、ローマ法の伝統を持たない人々が市民のなかで大勢を占めたことに求めている。この言葉に対するダンテの反応は第十歌とは大きく異なる。第十歌では、不幸の言葉をファリナータから聞いたために心を乱し、ウェルギリウスから、ダンテはこのあと天上で己の人生の意味を知るであろうことを告げられる。一方この第十五歌でダンテはひとまずこう答える。

「あなたが私の人生についておっしゃられたことを私は記します。／そして他の証言とあわせてそれを大切にしまい／その注解をしてくれるであろう貴婦人のところまで持っていきます」（同 88-90）

登場人物ダンテは、師の目には不幸と映るものが天上から、すなわち神の目から見ればことなって見えるであろうことをすでに知っている。そして同 93 行目でダンテの思想の一端が明かされる。

「運命の女神に対する備えは、彼女が何を望もうとも、できています」

フォルトゥーナ＝運命の女神については、すでにウェルギリウスがダンテにその眞の意味を説明していた^{xix}。気まぐれに人間を振りまわしているかに見えるその姿は、実は深い神慮に従って地上の事物にその影響力を行使している。つまり、ブルネットが「運命」あるいは「定め」として決定論的にとらえる事物の変転のなかに、ダンテは神慮があると考え、己の自由意志により理性を駆使して正しい道を選ぼうとする。それゆえ、ダンテの言葉はここで一度こう閉じられる。

「だから運命の女神はその輪をまわすがよい／思うがままに、それでも農夫は鍬をふるい続けるのだから。」(同 95-6)

高利貸しがなぜ、罪になるのかウェルギリウスがダンテに説明する個所で述べられているのだが、地上の事物は神から人間に与えられた贈り物であり、人間は額に汗してそこから命をつなぐ糧を手に入れなければならぬとダンテは考える^{xx}。同じように、事物の変転も神から人間に与えられた贈り物であり、そこには何か人間には測りがたい神慮が隠されているのだとダンテは主張する。ウェルギリウスのこの歌における唯一の台詞がこの直後にあり、ダンテの発言を肯定するものになっているのはもちろん偶然ではない。

「我が師(ウェルギリウス)はそのとき右の／ほほを見せながら後ろをふりむき私をじっと見た、／それから言った、『書き留める者はよく聞いていいる』」(同 97-9)

ここでついに、ローマ帝国の正統性を歌い、キリストの誕生を無意識にではあるが預言したウェルギリウスによって登場人物ダンテの主張の正しさが保証されたのだ(『神曲』の中では「右」が正しい側とされ、ここでもダンテの正しさ

を強調するために使われている)。

ダンテの時代には、強大化した大商人が都市貴族化し、社会的には豪族（マニヤーティ；以下マニヤーティ）として認定された。その多くは銀行家だったが、前述のように特に彼らの都市国家内部における私闘が激化していた。その事態に対し、ブルネット・ラティーニの思想は無力だった。彼は、都市内部の政治に関して、それを合議制で平和的に運営することを主張したが、その思想に決定的につながっていたのは、全世界的な視点である。彼は都市間の争いについては伝統的な教皇党主義者であり、それゆえ、ブルネットが生きた時代の教皇党と皇帝党の間の争いで起ったフィレンツェの分裂に関係している（フランス亡命時は後に黒派のクーデターを援助するシャルル・ダンジョンの庇護下にあったともされる）。しかし詳細は後述するが、ダンテの時代の領域国家形成途上のフィレンツェでは都市間の関係が重要であり、その都市間の関係がフィレンツェ内部の政治に影響を与えた場合に、暴力的なマニヤーティの行動を制御することは、その思想ではできなかった。

こうした全体を統御する軸の欠如は、彼の作品に表れている。代表作『トレゾール』の百科全書的なスタイルは事物を公平に扱うという態度の表現である。しかしこのスタイルは、『神曲』と違い、世界に一つの見通しを与えることを拒否する。ダンテが自分の百科全書的著作『饗宴』を未完のまま放棄したのもここに理由があると思われる。すなわち結果を所与のものとして受け入れてしまうのだ。そして同じく、結果を所与のものとして受け入れてしまうという理由で、プラトンに起源を持ち、イスラームで発達した占星術的決定論も自由意志論との間に深刻な対立を生んだ。これらの思想の代表としてダンテによって選ばれたのが、当時の文人・聖職者たちに広く受け容れられていた、イスラーム経由で入ってきた古代ギリシャの同性愛的趣向であった。ブルネットの思想とその業績は、実はその罪と表裏一体の関係にあることをダンテは理解していたのである。

7. 経済と平和

ジーン、A.ブラッカーが言うように、ダンテは経済活動が活発化することに対して反対する、没落貴族の末裔だったのだろうか。経済活動に対するダンテの答えの一部は、「地獄篇」第十六歌でなされる。第十六歌では、軍人であり、政治

家でもあった三人のフィレンツェ人とダンテは出会う。そして、都市国家内部の騒乱が、今度は、政治・社会的な側面から検討される。この歌はほぼ正確に 45 行ずつ均等に三つの部分に分かれる。それぞれの段落の持つ役割は明確である。そのうち、十五歌から続くこの問題に関しては、第一・第二段落で検討される。

第一段落ではダンテの口からフィレンツェの現在を述べるために再び過去と現在のつながりがつけられる。封建制社会を脱しつつあった勃興期の古き良き都市国家時代を代表する三人の軍人・政治家たちとの出会い、現在のありよう、かつての功績が描かれることになる。この三人が優れた人物であろうことは（しながら社会的に高位の身分であったと解釈することもできる）ウェルギリウスによって明かされる。

「あの者たちは丁重にむかえなければならぬ」（地・十六・15）

そして三人の名が明かされその行いが報告される。グイード・グエッラ四世は 1220 年ごろに生まれ、皇帝フェデリコ二世の宮廷で青春を過ごしトスカーナに帰った後で教皇党の領袖となる。1255 年アレツィオの戦いで皇帝党を市内から追放、モンタペルティの戦いで教皇党が敗れるとフィレンツェを追放される。皇帝党に決定的な敗北を与えたベネヴェントの戦いではフィレンツェから亡命していた教皇党を指揮した。すでに第六歌で名前があげられていたテッギアイオ・アルドブランディはアディマーリ家の出身で教皇党に属している。モンタペルティの戦いに際して戦闘を避けるように主張した。同じく名前があげられていたヤコポ・ルスティックチも教皇党、サンジミニャーノとヴォルテッラの和平に尽力した。

第二段落では、第十歌の罪人たちと同じようにこの三人も現在への認識を欠いているため、三人はダンテに、その当時にあって、フィレンツェのかつての良き習慣が残っているかどうかたずねる。

「雅な振るまいと雄々しき力は、教えたまえ、我らの都市に、／かつてそうであったようにいまもあるのか」（同 67 - 8）

これに対してダンテは答える。

「新参者達と降って湧いた稼ぎが／傲慢と放縱を産んでしまった。フィオレンツアよ、おまえの中に。それゆえ、すでにおまえは涙を落としている。」
 (同 73 - 5)

『神曲』のなかで初めて、ダンテが、己の口から、フィレンツエの政治的・倫理的欠陥を指摘するのはここである。ダンテの主張をわかりやすくすると以下のように考えられる。

歴史的に見て、都市国家フィレンツエは 1290 年代に入ると銀行業を中心としたマニヤーティが教皇庁と結びつき、急激にその富を増大させた。それは、1270 ~80 年代にかけて、シエナのボンシニヨーリ銀行との競争に勝って教皇庁の銀行家としての地位を確立したからである。その結果、労働によらない金融操作によって大銀行家が財を手に入れるようになった。これが「降って湧いた大儲け」のことである。

フィレンツエは例えば、この「大儲け」を公共建築などに投資した。1290 年代の大建築、教皇ボニファティウス八世の援助により着工されたサンタ・マリア・デル・フィオレ大聖堂や、現ヴェッキオ宮（プリオーレの入るシニョリーア宮殿）、あるいは、現在も残る市壁などがそれである。ここからもわかるとおり、都市国家フィレンツエは拡大し、周辺の封建領主の所有地を支配下におさめるとともに、その勢力圏も大きく拡大し、領域国家化した。こうして、市壁内に取り込まれた近隣の封建貴族等が大商人と結びつくなどし、その結果、彼らマニヤーティは軍事力を行使して互いに争うようになった。その彼らが「新参者」のことであった。

フィレンツエの騒乱はそれらマニヤーティが、己の利益の追求だけを自分達の行動指針とした結果である。これが「傲慢」と「放縱」を意味する。そしてダンテ自身、封建貴族ドナーティ家と新興の大銀行チエルキ家との争いから亡命を余儀なくされたと考えることもできる。しかも最近の研究ではフィレンツエのマニヤーティが階級としての一体感を持ち、ヘゲモニーの確立に努めるのは 1400 年代以降であり、ダンテの時代には、彼らは、経済的動機とともに、一族郎党をまとめて血族主義的（封建貴族的）な行動規範を持っていたとされる（ダンテは、戦闘的な封建貴族の怨恨などの感情とそれに付随する私的な報復的暴力を抑え

ることができるのは、前十五歌でローマの精神と言わっていた、かつての、ローマ皇帝たちに従順だった封建領主たちの宮廷における習慣・倫理であると考えた)。一方で、ダンテも統領を務めたプリオーレ制に見られるように、平民層が政権を奪取しようとする動きもあった^{xxi}。彼が統領に就任できたのは、そのためである。

経過をもう少し具体的に整理してみよう。教皇党と皇帝党の争いは貴族間の争いであり、それに、まず都市貴族化し、銀行業などに乗り出した教皇党貴族が勝利した。これが、ブルネット・ラティーニらが活躍した時代である。

そして次に、教皇党内の白派と黒派の間で争いが起きた。直接の発端は、隣同士に館を構えていた、古くからの封建貴族であるドナーティ家と新興の大銀行家であるチエルキ家がいさかいだった。その二家を中心に周囲のマニヤーティやマニヤーティには数えられていない大銀行家らがそれぞれの党派関係から派閥を形成し^{xxii}、争ったが、チエルキ家を筆頭にする白派が平民層と連合することで政権をとった。この政権時にダンテは統領に就任し、両派の争いを調停するために、ダンテの妻の一族でもある黒派の領袖コルソ・ドナーティやダンテの詩友であった白派の貴族グイド・カヴァルカンティを市から追放処分にしている。これは明確に平民層（ポポロ；以下ポポロ）の平和を優先する思想を表現している。

最近までダンテが反動的な思想を持っていたとされてきた理由に、「天国篇」第十六歌冒頭で、彼が、自身の先祖が騎士であったことを聞いて己の血統であるアリギエリ家が貴族であったことを誇りに思ったというものがある。しかし、それを聞いて初めて誇りに思ったという記述からは、むしろアリギエリ家は社会的には貴族＝マニヤーティとは認知はされておらず、ダンテもそれを自覚していたということが分かる^{xxiii}。歴史的事実としては、むしろアリギエリ家は、自身もその一人である地域の平民層に属する商人＝ポポロらと関係する貸金業を営み、『神曲』からも読みとれる彼の政治的立場は、ここに見られるようにポポロの営む商業の利害を表現する。つまりその限りで商業に肯定的なのである。もちろんそれゆえに彼はフィレンツェの統領に就任したのであり、領域内の職人の新しい技術開発や農民の利益を守るために戦争に反対し、マニヤーティの多い大銀行などの逆關税的な、地域経済の発展や技術革新を阻害することになる、金融操作による利益^{xxiv}を求める政策に反対した。

こうして、黒派と白派の争いには経済的な問題も関係し、平民層の利害を代表

する白派政権の政策に対し、教皇庁との結びつきによる金融政策を優先しようとした黒派は、傭兵としてフランス系のアンジュー家をフィレンツェに招き入れ、クーデターによって政権を掌握し、その結果としてダンテは祖国から追放された。

この党派間の争いには対外的なネットワークが関係した。そもそも、教皇党、皇帝党は明確に政治組織であり、各都市国家の「党」は互いに連絡をとりあっていた。そして都市貴族の立場を支えるものに、経済以外に名声があり、それはフィレンツェを越えた地域や都市の民衆の間での評判をともなうネットワークによった。フィレンツェ内部の勢力争いは、都市間の政治的・党派的関係と連動していたのである。

ダンテによれば、ダンテと同じ文人政治家は、都市国家の運営について重要な役割を果たしてきたが、例えばブルネット・ラティーニの思想に見られるように、共和国の政策として、彼らが世界全体のなかでどのような方針をとればよいのかという意識を欠いたため、現在の騒乱を招くことになった。一方、軍人・政治家の側は、彼らの持っていた政治・倫理の行動指針である「雅な振る舞いと雄々しき力」を次世代に伝えることに失敗した。同性愛の罪はここではそのことを示している。その結果、際限のない暴力が蔓延することとなった。「地獄篇」第十六歌でのダンテの言葉にはそれだけの重みがあったのである。

本節を終えるにあたって、第十七歌を参照し、ダンテが各都市に共通する問題として高利貸し＝銀行家をどのように取り上げているのか考察する。

彼らはほとんど動物として描かれ、個的な特徴を失い、ただ、ぶら下げている財布についている家紋から、ほとんどが古くからの名家の出身であることがわかる。例外として、唯一、新興の商人であるヴィタリアーノ・ジョヴァンニ・ディ・モンティだけが名をあげられている。ダンテは都市国家内部における社会的混乱の最終的な原因を彼らに求めていると思われる。彼にとって都市内部の暴力的な闘争を防ぐ政治・倫理的態度は、彼の考えるローマのものだった。そのローマからの伝統を保つべき貴族の家が、むしろ新興中産階級と結ぶことでその政治・倫理的思想を失ったことが現在の混乱を招いているとダンテは考えたのである。

先ほど引用し、繰り返しになるけれども、人は、神からの贈り物としての自然に働きかけて、その恵みによって命をつながなければならないとダンテは主張する。それゆえ、金銭が金銭を産み、財をそれ自体で生むという利子は本来あってはならないとする。自然は神の業からその営みをまね、人間の営みは自然の業を

まねたものであり、この高利貸しという行為は両者をともに否定し、間接的に神に暴力をふるうものであるとした。ダンテにとって、金銭は交換の道具として存在し、その意味で公共財であった。高利貸し＝銀行家の行為は、本質的にこの考え方と相容れない。ここで描かれている銀行家の姿は、己の財としての金銭に執着し、その行動指針が利益の追求という一点にしほられた結果、むしろ金銭が彼らの思考を支配してしまったというものである。そのため、彼らは己の行動の結果に対して、社会的、あるいは倫理的価値判断を下すことができなくなった。実際に、彼らは同じ領域国家内に暮らす農民や職人などの下層市民の利益を考えることはなかった。ましてやダンテの祖国フィレンツェの膨張は、教皇庁と大銀行家が緊密な関係を結び、教皇庁の拡大政策のための戦費を負担し、傭兵としてフランス勢力をイタリアに招き入れたことによって達成されたのである。

ジーン、A.ブラックマーの著書には、その目次にすでに明確に表れているが、都市共和制の重要な観点である、マニヤーティと同じ商人層でありながら文化的・政治的志向性の異なるポポロの関係という概念が欠如していることが分かる。のために、典型的なポポロの政治的・宗教的指向を示すダンテの帰属グループについて、意図的に作られた登場人物ダンテの「天国篇」での言葉をそのままに受け取ってしまったのだ。

8. ポポロの思想とダンテの現実描写

『神曲』を読み進めていくと分かることだが、各篇の同じ数字を持っている歌が相互に関係していることがある。例えば、各篇の第六歌は政治の歌と呼ばれ、「地獄篇」のそれはフィレンツェの、「煉獄篇」のそれはイタリアの、「天国篇」のそれはローマ帝国（ダンテの思想では地上世界全て）の政治をめぐって展開していく。同じように「地獄篇」と「煉獄篇」の第十六歌は、三人の高貴なる人物が登場することで共通し、また「平和」という一つの命題について論じられており、それは「地獄篇」において問題となったフィレンツェの理想の状態について、ついに「天国篇」第十六歌で解答が与えられるという構成で、各篇が有機的に関連している。ここでは、「煉獄篇」の第十六歌を参照しつつ、ダンテの考えをたどっていくことにする。

「煉獄篇」第十六歌では地上の戦乱の原因が探られるが、地上の戦乱について

は、すでに第十四歌で、地獄篇を思わせる文体により、その原因が天空の影響かもしぬないとほのめかされつつ、トスカーナの諸都市を動物の悪癖に例えることで描写されていた。この第十六歌では、ダンテの化身とも言われる、一宮廷人マルコ・ロンバルドの口から、その地上世界の戦争状態についての原因が語られることになる。

「私は北イタリアの者であり、我が名はマルコといった／世の習いを知り、今では誰も／弓で狙わぬあの古い徳を愛した」。(46 - 8)

マルコ・ロンバルドの場合も「地獄篇」第十六歌の「雅な振るまいと雄々しき力」と同じく、「古い徳」が問題にされていることが分かる。彼は、地上の出来事について、それは天空の影響のせいなのか、それとも地上、つまり人間の側にあるのかダンテからたずねられ、以下のように答えた。

「君ら生ける者達は、あらゆる事象の原因を／ただ天上に帰する、まさしくそれが／すべてを運行に合わせて必然により動かしているかのように。／もしそうであるならば、君らのうちに／自由意志は存在できなくなり、そのため／善には喜び、悪には死で報いることは正義でなくなる。…君らには善と悪を明らかにする光（理性）と／そして自由な意志が与えられている。それは、／空との最初の戦い（天空からの影響）で苦戦するが、／もしも正しく育まれたならば、ついにはすべてに打ち勝つ。／さらに大いなる力とさらに優れた本性（神）に／自由なる君らは従うのだ。それこそが／君らのうちに知性を創造するが、それは空か支配下に置いていないものなのだ」(67 - 81)。

上記からもわかるように、ダンテはここでマルコ・ロンバルドの口を借り、「地獄篇」第十五歌での、ダンテとダンテの師ブルネット・ラティイニとの間で行われた議論に対して結論づけているように思える。すなわち、師や、あるいは「煉獄篇」第十四歌で登場したグイド・デル・ドウーカらの、地上の災厄を天空からの影響＝フォルトゥーナに帰する思想に対し、ダンテは自由意志が神に由来し、神に由来するその部分は天空の影響の支配下にはないことを述べ、状況を乗り越

えていく人間の側の能力を重視し、決定論を排する。こうした冷静な、哲学的議論が展開するのも、「地獄篇」と比較した場合の「煉獄篇」の特徴となっている。そして、この歌の終わり近くで、自由意志の行使については高貴さと血統がかかわらないことを示すために、「地獄篇」第十六歌の高貴なる名高い三人に比して無名な、しかし真に正しい人々として、ロマーニヤの三人の老人の名があげられることになった。

ここに大物たちのドラマティックで悲劇的な人生を描いた地獄と、ダンテの周囲にいた市井の人々が多数現れ、己の人生を冷静に振り返る煉獄の違いが端的に表現されている。つまり、ダンテはここで、大商人や大商人に近い有力者たちの果断な決定ではなく、むしろ市井の人々の冷静な判断というものを重要視していることが分かる。そして、無名の三名をここでダンテが上げたことは、彼自身の「地獄篇」での主張の自己修正だったのかもしれない。というのも、「地獄篇」第三歌で善悪のどちらにつくか態度を明確にしなかった者たちについて（ウェルギリウスの言葉とはいえ）厳しく断罪しているからだ。

「この惨めな有様に／留まっているのは／悪名も名誉もなく生きた輩の卑劣な魂だ。／この者どもが入れられているのは、／神に反逆もせず忠実でもなく／己だけを思った天使どもの邪悪な合唱である。／天は自らの美しさが翳らぬようこの者どもを追放している。／地獄の深淵も受け入れぬ、／悪人どもが彼らと比していくらか誇りを抱くかも知れぬからだ」(34 - 42)

この人間の功罪を美的な観点から判定し、むしろ「大いなる心の強さ」を消極的な態度に優先する思想は、「地獄篇」の限界を明らかにしている。というのも、現実的な問題として、自らの態度を明確にするよう求められ、また、それが可能でもあった社会的階層は、敗れても他に逃げる場所のある恵まれた人々だからだ。他都市に信条を同じくする党派など持ちようもない層は、政治的な態度を明確にするよりも、自分自身や自分の家族が生き残ることを優先するしかなかったはずである。つまり大多数の人間はダンテの求めるような決然とした態度はとりようがない。だが、「煉獄篇」で問題になっているのは内面の改悛であり、内面の思想なのだ。というのも、煉獄は己の罪を改悛した人々の場所だからだ。そもそも

「煉獄篇」の冒頭で登場人物ダンテは謙譲の徳を示す葦をその身に巻き、続く第二歌、第三歌、第四歌では、理性の象徴ウェルギリウスのある種の知的傲慢さが指摘されていた。

ダンテは煉獄において現世での正義を求めて直接的に武力に訴えることではなく、無名の人々の内なる個人的な思想そのものを肯定している。煉獄は、困難に立ち向かって正しい行いを貫徹した天国の聖人でもなく、神慮に逆らって己の行いこそを是とした地獄の罪人とも異なる、当時の街中を普通に歩いていた大多数の都市住民のために作られた、個々の人生を振り返る場所だったのである。

そもそも煉獄とは 1150 年代以降に出てきた考え方であり、ダンテの時代には煉獄の場所や構造が確定していたわけではなかった。キリスト教が興ってから長期間、死後の世界は天国と地獄の二つに分かれていた。これは、世界が貴族とそれ以外の人々の二つに分かれていたことを反映している。その中では、聖職者はまだ一つの階級を形成してはいなかった。なぜなら、農業技術が発達する以前の、食糧事情がよくない時代に農業に従事せずに暮らしていくた彼らもまた、その多くは貴族出身の支配者以外の何物でもなかったからだ。ところが商業が栄えて封建制の農業経済にとって代わり、都市が勃興してくると、第三の勢力である市民が台頭してきた。こうして社会が上層階級（貴族・聖職者）、中間層（都市住民）、下層階級（農民や都市労働者）に分かれると、死後の世界も天国、地獄、煉獄の三階級に分かれた。高貴さでさえ貴族の専有物としないダンテにとって、高貴とは、血統でも、教皇に代表される聖職として神に近いことでもなく、生き方の問題となり、それとともに死後の世界における人の高貴さの判定も複雑になった。さまざまな職業と生き方が可能になった世界に生きていたダンテにとって、多種多様で複雑な人生に死後の世界を対応させるためには、贖罪の場である煉獄が必要となったのである。

ダンテは、地域経済と密接な関係を持つ小さな貸金業の家に生まれた。そうした意味で典型的な一般市民=ポポロの人間として、煉獄を、それまでにあったように地獄に近い地下に、天国との回路を絶たれた第三の場所として置くのではなく、地上で最も高い山の頂、天国のすぐ近くに配置した。そして煉獄の魂は、生前に犯した七つの大罪を償えば天国に行けるようにした。しかもその贖罪は債務に例えられ、清算が終わると天国に昇天する。それはまさしく、アリギエリ家の生業である貸金業を思い起こさせる。

ダンテの、人間の現実の行動を観察して、それを本当にそうであるかのように描写する能力は、現実の人間の行動や事績を観察し、商業的に見合うかどうか合理的に考察する必要のある、彼の一家の職業に必要な能力だった。父の職業上、彼の家には、生まれたばかりの都市世界の多種多様な職業に従事する、さまざまな人物が訪れたであろう。そしてフィレンツェだけでなくイタリアを取り巻く政治経済のこと、広くヨーロッパ全体や、その向こうに広がる遠い世界のことを聞いたであろう。こうして、ダンテは、タイプとしての人生を生きる以前の世界の文学、それまでのアレゴリー主導の文学とは異なった、かけがえのない個人としての人生を生きていく人間の姿を、他人にも理解可能な姿で合理的に捉え描くことになったのである。

9. ダンテにおける平和

『西洋政治思想史』^{xxv}において、鷺見誠一は、「中世人は個人として生きるのではなく、種々の身分に固定され、そしてそれぞれの団体の中に所属していた。個々の人間は、一定の身分が与えられ、特定団体の中に編入されることによって人間として生きることができたのである」と、中世の世界を描いている。しかし中世末期のダンテはすでに、『帝政論』や『神曲』で個々の魂の高貴さにおいて本質的な差はないという議論を展開している。ここでは、そうした記述がまとまって収められている論考『帝政論』を考察の対象とする。

『帝政論』は、日本語文献では例えば岩倉具忠の『ダンテ研究』では 1312 年の執筆とされ、また将基面貴己は「1310 年代の中葉にあたりに執筆された」^{xxvi} と推定している。イタリア語文献を見ても、通常は 1312 年頃、1317 - 18 年、あるいは 1321 年の執筆とされる。いずれにせよ「地獄篇」の執筆後、神聖ローマ皇帝ハインリッヒ七世イタリア親征中（しかしダンテ自身がこれに関係して活動をしていると推定され、この戦争中の執筆は物理的に不可能だとも考えられる）か「煉獄篇」執筆直後、最も遅い場合で『神曲』（これも 1320 - 21 で執筆年代は確定していない）執筆直後となる。このことから、『帝政論』に表現されているダンテの政治思想が『神曲』を貫くそれであるとされる。

『帝政論』が検証する帝国とは、「普遍的支配とも言われる地上世界の帝国は、全時間上の万物、すなわち時間中に存在する全存在と、時間によって計量される

全事物を上から統べる唯一の統治機構である^{xxvii}」とされる。続くパラグラフでダンテは、この帝国について以下の三点が問題になるとする。

「それが世界の善きあり方に必要かどうか、ローマ人がその担い手であると自負するところにその権利があるかどうか、帝国の正統性は神に直接由来するのか、あるいは他の代理者、または神の代理に由来するのかどうか」。

結論から言えば、ダンテはこれらについてそれぞれ肯定していくのだが、その前提部分を論じる第三章、第四章で、世界創造と人間存在について、これまで本章で論じてきたフォルトーナと自由意志との関係を哲学的に論じている。すなわち、「人類社会の全体における目標は何か」^{xxviii}である。

これについてダンテは続くパラグラフで「自然（神によって運行される宇宙全体の営為を指す）によって創造される人間の親指はある固有の目的を有し、同様に創造される手は親指とは異なるある目的を有し、同様に腕が、そして一人の人間全体は他とは異なる目的を有する。同様に、個人と家族とある地域の共同体と都市と王国はそれぞれの目的を有し、それらの上位にある目的のために、永遠の神は自然の御業という手段によって人類全体を存在するにあらしめているのである」と論じ、その後で「人類社会全体に固有の営為というものが存在し、そのために数多の個人が、これほどの数で、（神慮により）定められている」^{xxix}とする。そして「可能的知性」^{xxx}こそが、個々の人間に与えられた普遍的形相であり、それが潜勢（可能）態から顯勢（現実）態に変わることで、総体としての人類に固有の営為が実現されているとする。この可能的知性をめぐる議論の結論は続く第四章で述べられる。

「人類の種としての全体の行動は、まず最初に知るという目的のために、第二はその展延として行為するために、可能的知性の全潜在力をあらゆる瞬間に現実化することであり、これは、個人が静かに安らいでいるときに慎重な判断力とその知（アリストテレスで要確認）が完成するように、人類全体が安らかに静謐なる平和にあるときに、自由にして容易に、人類固有の——『天使にも劣らぬほどにおまえは創造された』という格言のように神々しいその行為にいそしむのだ」^{xxxi}

この「可能的知性」については、「煉獄篇」第二十五歌において自然哲学的議論が展開され、それが神に由来し、発生時に人間の肉体に吹き込まれる靈的部分であると、疑似生物学的に説明される。ゆえに人間の魂は等しく神に由来することになる。また、そこでは肉体も天空からの各種の「徳」の影響を受けるとされる^{xxxii}。そのようなダンテの哲学ゆえに、ここで人間存在とその目的が存在論的に説明される。

こうしてダンテの地上世界の営為の一般的な説明を理解した後では、「地獄篇」第十五歌のフォルトゥーナや「煉獄篇」第十六歌（第十四歌）で言及されている「天空の影響」が、ここでの自然の営為であることが理解され、それらは本来、「人類全体が安らかに静謐なる平和にあるときに」、個人がその中で可能的知性を全的に開花させ、その結果、總体として全人類が神慮にかなった行動をとれることが言われている。このように、ダンテにおいては等しく神に与えられた個別の魂のそれぞれの多様な人生が重要視されることになり、そのためには人類全体の平和が必要とされたのである。

この人類全体の平和という思想は、ダンテの時代にはまだ希薄だった。というよりも、「平和」という概念自体が1300直前に出始めた思想であった^{xxxiii}。そして、フェデリコ・サングイネーティは、近代の平和主義は中世においては封建諸侯により暴力的に弾圧されたと指摘している^{xxxiv}。そこではマルシリオ・ダ・パドヴァの『平和の守護者』やそれ以前の、ダンテも影響を受けたレミージョ・ジローラミの『共通善について』や『善なる平和について』について言及されているが、都市国家の枠を超えた人類全体の平和を主張したところにその特徴があるとされる。実際に、作者であるダンテは、地獄で登場人物ダンテの目を通して、つまり登場人物ダンテの目を通して世界を見る読者に、ブルネット・ラティエニラを会わせることで、都市国家という狭い範囲での「平和」主義を乗り越えさせようとしている。そして、「煉獄篇」では都市国家を超えた、イタリア全体の、あるいは、人類の発生に共通する靈を基盤に種としての人類の平和を説いたことから、宗教や身分を超えた相互理解の可能性による世界全体の平和をその思想の枠内にとらえようとしているのである。

一見保守的に見え、実際にそのような批判を受けることが多い『神曲』の政治的スタンスは、実際には当時の社会的状況を正確に捉えていた。その社会を新た

に担う個人としての性格を帶びた都市住民たちの姿を描くために、平和を希求するダンテのリアリズムは生まれてきたのである。

参考文献

一次文献

Dante Alighieri, *La Commedia secondo l'antica vulgata* a cura di Giorgio Petrocchi, Le lettere, 1994.

Id. Monarchia, a.c. Paolo Chiesa e Andrea Tabarroni, Salerno, 2012.

Id. Monarchia, a.c. Bruno Nardi, Mondadori, 1979.

なお、*Divina Commedia*『神曲』の翻訳については全て『神曲』(原基晶訳)、講談社、2014 から引用し、本文の場合は「篇、歌、行」の順で、解説等の場合はページ数で表示した。また *Monarchia*『帝政論』につけたものは筆者の試訳である。

二次文献（外国語）

G. Contini, *Un'idea di Dante*, Einaudi, 1970.

Maria Corti, *Scritti su Cavalcanti e Dante*, 2003. Einaudi.

Dante Alighieri, *Œuvres complètes: traduction et commentaires par André Pézard*, Gallimard, 1965.

John M. Najemy, *Storia di Firenze 1200-1575 (A history of Florence 1200-1575. Blackwell, 2006)*, Einaudi, 2014.

Il percorso politico di Dante in Guida alla Commedia, AAVV, Bompiani, 1993.

二次文献（日本語）

デ・サンクティス『イタリア文学史 上』、現代思潮新社、1970。

ヤーコプ・ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』、筑摩、2007。

村松真理子『謎と記号で読み解くダンテ『神曲』』、角川、2013。

ジーン、A.ブラッカー『ルネサンス都市フィレンツェ』(森田義之・松本典昭訳)、岩波書

店、2011。

原基晶『書物の来歴、読者の役割』、慶應義塾大学出版会、2013。

エーリッヒ・アウエルバッハ『世界文学の文献学』、高木昌史他訳、1998。

Id.『ミメーシス』上、篠田一士・川村二郎訳、1967。

将基面貴巳『ヨーロッパ政治思想の誕生』、名古屋大学出版会、2013。

J. グデ『救済の帝国』(小林公訳)、木鐸社、1976。

杉浦民平『ルネサンス文學の研究』、潮流社、1948。

齊藤寛海『中世後期イタリアの商業と都市』、知泉書館、2002。

佐々木毅、驚見誠一他、『西洋政治思想史』、北樹出版、1995。

i デ・サンクティス、『イタリア文学史 上』、現代思潮新社、1970、p.78; p.98; p.251.

ii ヤーコプ・ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』筑摩、2007 (原著 1860)、p.164; 「国民」という言葉はないが、デ・サンクティス『イタリア文学史 上』p251.には「彼こそは当時における最も強烈な個性であり～～当時のあらゆる存在を一身に集約していた」とあるが、デ・サンクティスの念頭にあるのはいつでもイタリアであった。

iii G.Contini, *Dante come personaggio poeta della Commedia, in Un'idea di Dante*, Einaudi, 1970 (論文自体は 1958 年初出) pp.38 - 40. では、当時のエチケットとして Agens と Auctor が区別され、登場人物ダンテ「私」は虚構の存在であることが明らかにされている。この論考は以後のダンテ批評に大きな影響を与えた。

iv 2006 年から 2013 年まで続いたロベルト・ベニーニによるイタリア全土を回っての『神曲』朗読などは、EU という枠組みやグローバリズムに対する国民国家的反応だと思われる。

v 一例だけあげておくと、村松真理子『謎と記号で読み解くダンテ『神曲』』、角川、2013, p.230 - 32. で、2013 年 6 月のフィレンツェから遠く離れたジェノヴァ近郊の町の広場でのダンテの朗読に聴衆が感動していることに感動したという記述がある。

vi フィレンツェ史の場合の代表例は、ジーン、A. ブラッカー『ルネサンス都市フィレンツェ』(森田義之・松本典昭訳)、岩波書店、2011 (原書 *Renaissance Florence Updated Edition*, University of California Press, 1983)。

vii 「失われた自筆原稿を求めて」『書物の来歴、読者の役割』、慶應義塾大学出版会、2013 など。

viii エーリッヒ・アウエルバッハ『世界文学の文献学』、高木昌史他訳、1998 (原著 1967)、pp80 - 1. なお「フィグーラ」の初出は 1938。

ix Id.『ミメーシス』上、篠田一士・川村二郎訳、1967 (原著 1946)、p.203.

x 『地獄篇』、pp.547 - 48.

xi 同書、p.31、注 13 ; p.516.

xii 『ダンテ百科事典』によると、『トレゾール』は雄弁術を重要視しているところにその特徴があるという。

xiii Maria Corti, *Scritti su Cavalcanti e Dante*, 2003, Einaudi (初出は *Percorsi dell'invenzione*, 1997) . pp.266 - 7.

- ^{xiv} 一例だけあげておくと、J. グデ『救済の帝国』(小林公訳)、木鐸社、1976 (原書 1969) pp.7 - 8 ; pp.11。
- ^{xv} 前掲書、「地獄篇」第十六歌 73 - 74 行。
- ^{xvi} 前掲書、ジーン、A. ブラッカー、p.154。
- ^{xvii} これは Gaetano Salvemini はじめとするマルクス主義的な単線論的発達史観による歴史の整理の中で、封建制がルネサンスにより打倒されて市民が生まれたとしたことに始まる。それを受けたルネサンスを日本に紹介した杉浦民平は、ダンテと対立した側の教皇党黒派は、領袖コルソ・ドナーティに代表されるように封建領主とした。この歴史観は現在でも影響力を持ち、村松真理子や河島英昭も杉浦と同じ歴史的枠組みを維持している。
- ^{xviii} Dante Alighieri, *Oeuvres complètes; traduction et commentaires par André Pézard*, Gallimard, 1965, pp.971 - 2.でアンドレ・ペザールは、ブルネットが母語でない古フランス語で『トレゾール』を著したことを見出しているとした。
- ^{xix} 「地獄篇」第七歌 78 - 96 行；pp.533 - 34。
- ^{xx} 「地獄篇」第十一歌 95 - 111 行。
- ^{xxi} John M. Najemy, *Storia di Firenze 1200-1575 (A history of Florence 1200-1575)*, Blackwell, 2006), Einaudi, 2014, pp..106 - 12.なお、現在は同書がフィレンツェ史を学ぶ上での最初の基本文献になる。
- ^{xxii} 同書によれば、黒派には、反動的封建貴族として名高いコルソ・ドナーティを筆頭に、マニヤーティとして認知されている大銀行家のスピーニ、パッティ、ヴィスドミニ、バルディ、ロッシ、ブルネレスキ、トルナクインチ、ブオンデルモンティ、トーザ家の一部。マニヤーティ以外の有力家では、アッチャイウォーリ、アルベルティ、ジューディチエ、アルビッツィ、メディチ等。白派のマニヤーティは、チェルキ家を筆頭に、アディマーリ(『神曲』の注での登場人物は黒派とされるが、家としては白派に属する)、カヴァルカンティ、ゲラルディーニ、フレスコバルディ、スカーリ、ネルリ、アバーティ、トーザ家の一部。非マニヤーティとしては、アンテッラ、カニジャーニ、リヌッチ等。ここから分かることおり、黒派について封建貴族を代表する勢力とする、ブラッcker『ルネサンス都市フィレンツェ』p.154、将基面貴巳『ヨーロッパ政治思想の誕生』、名古屋大学出版会、2013、p.146、村松真理子『謎と暗号で読み解くダンテ『神曲』』p.21、杉浦民平『ルネサンス文學の研究』、潮流社、1948、p.15.らの、マルクス主義史観に起源をもつ階級論的な歴史観では、この時代の現実を説明できない。なお、これらの家については「天国篇」第十五、第十六歌、及び pp..571 - 85 参照。
- ^{xxiii} 「天国篇」pp. 577 - 78。
- ^{xxiv} 齋藤寛海『中世後期イタリアの商業と都市』、知泉書館、2002、pp.377 - 387.には、ガベッラと呼ばれる間接税が近隣との交易に対して重くかかり、国際的な経済活動には軽かつたことが指摘されている。
- ^{xxv} 佐々木毅、驚見誠一他、『西洋政治思想史』、北樹出版、1995、p.44。
- ^{xxvi} 将基面貴巳、『ヨーロッパ政治思想の誕生』、名古屋大学出版会、2013、p.146。
- ^{xxvii} Dante Alighieri, *Monarchia*, 1.2.2. ただしこれは Paolo Chiesa, Andrea Tabarroni の注。Nardi らはこれを、その他の君主権力に理解する。
- ^{xxviii} 同書 1.3.1。
- ^{xxix} 同書 1.3.4。
- ^{xxx} 同書 1.3.6。
- ^{xxxi} 同書 1.4.1-2。
- ^{xxxii} 「煉獄篇」第二十五歌 37 - 75 行。
- ^{xxxiii} 将基面、前掲書、p.102。
- ^{xxxiv} *Il percorso politico di Dante in Guida alla Commedia*. AAVV, Bompiani, 1993, pp.75 - 6.